

2024.3.1

第1版

高知

【月決め3,500円(うち消費税259円)・1部売9(税込)200円】

【第3種郵便物認可】

追憶のマーシャル

ビキニ事件 70年

■1■

米国の核実験

「何も知らされなかった」

人は、もうほとんど亡くなつたと思つねえ」
横木。漁師の父親を持つ6人きょうだいの3番目。戦中教育のため、小学校が国民学校に変わったその1期生だった。子どもの頃から、船にカツオ船が戻ると、船に飛び乗ってエンジンルームをのぞき込んだ。「これがディーゼルかあ。かつこえ戦争が終わわり、中学を卒業して船乗りになった。最初の1年は清水のカツオ船で「かしま」と呼ばれる船に乗り、夏はカツオ、冬はマグロと年2回、漁へ出る。船には県内外から若者が集まった。

深く刻まれた顔のしわ。まぶたの上の白い眉が、過ぎた歲月の長さを物語る。室戸市室戸岬町の小笠原勝さん(89)は70年前の1954年3月、マグロ漁船に乗り、太平洋にいた。室戸船の「第五海福丸」米軍によるマーシャル諸島・ビキニ環礁の水爆実験で被災し、船本のマグロを廃棄することになったのだ。

小笠原さんは、土佐清水市で生まれ育った。旧姓「中野」。父は漁師で、母は縫製工場の作業員だった。戦中、父は海軍で働き、母は縫製工場の作業員として働いていた。戦後、父は海軍を退き、漁師として生活した。母は縫製工場の作業員として働き、その後、主婦として生活した。

「ミッドウェーは毎日大しびで、漁も少ない。漁船長も嫌がってビキニへと向かった」と回想する。

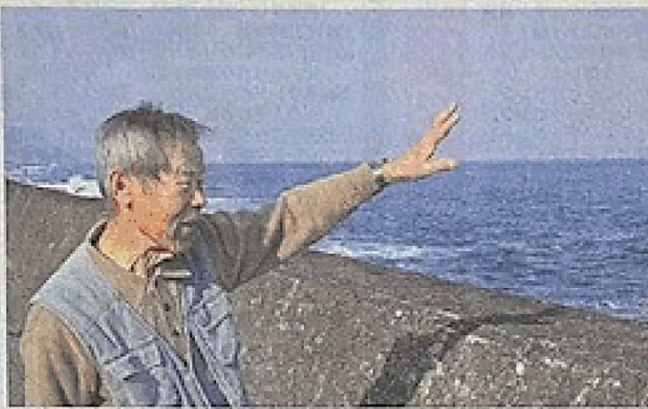
3月1日、米軍はビキニ環礁で水爆「アラバスター」の核実験を行った。その威力は、広島原爆の約千倍とも言われる。小笠原さんは爆音を聞いた記憶も、火柱や

死の灰を見た記憶もない。それもそのはず、この日、海福丸はまだビキニのはるか北で、ミッドウェーへの途上だった。

「私も普通の船員には何も知らされなかった」
海福丸はそのままだけに、東部の海風に入り、13、26日に操縦する。山中さんの日記では、19日に「この付近、原子病流行」との知らせが無線に入った。が、漁は構わず続いた。小笠原さんも、漁場ではデッキで他の船員と夜通し縄を引つ張り、マグロを揚げた。

大量のマグロを載せた海福丸は4月7日、東京に戻った。船員たちが興奮に気付いたのはそのときだった。

日本漁船が約千隻も被災した。米軍によるビキニ環礁での水爆実験、いわゆるビキニ事件は今年で70年を迎える。当時を知る生存者が減る中、証言を続ける元船員、聞き取りに奔走する支援者、国との裁判に闘つ遺族らの姿を追った。



今も日課で海岸沿いを散歩する小笠原勝さん。海の仕事への誇りは変わらない(室戸市室戸岬町)



米軍が実施した水爆実験「アラバスター」1954年3月(米国立公文書館提供)

(前編) (1)

追憶のマーシャル

ビキニ事件 70年

■ 2 ■

1954年3月1日、米国はマーシャル諸島・ビキニ環礁で水爆「ブラボ」の実験をした。その約10日後、室戸のマグロ漁船「第五海福丸」は向も知らず、環礁海域に入った。放射能で汚染されたマグロをひたすら取り、東京に戻ったのは4月7日だった。

国内では3月16日以降、静岡の「第五福竜丸」の被災が報道され始めた。放射能で汚染されたマグロが流通したこともあり、既に大騒ぎになっていた。

東京・築地で海福丸を待つていたのは、白衣の厚生省職員だった。放射線量を測るガイガーカウンターを手に、水揚げしたマグロや船員の衣服を調べ始めた。船員だった小笠原勝さん

元船員の記憶

「マグロふてていっさ」と

⑨ 室戸市室戸御町IIがその時に、被曝したこと当時を振り返る。

「魚を測ったら、機械から「ガリガリガリ」と音が海福丸が釣ったキハタマグロ出よった。特に大きな音がしたのには手袋。1週間ほど使いつけて、放射能が蓄積しちよったろか。私らはた漁船では断トツに多い。

「マグロは全部、ふててこいと言われて…。夜も寝んぞちたのはたた働きたった」

海福丸は再び出港した。マグロを釣りにではなく、捨てに行くために。



⑩ 船員手帳にある若き日の小笠原勝さんの写真
⑪ 第五海福丸(小笠原さん提供)



小笠原さんによると、厚生省職員も同乗した。すぐ船に酔ってな一人にも酔立たんかった。「一昼夜、船を走らせ、海にマグロを投げた。

小笠原さんが海福丸に乗ったのは、結局、この1年だけだった。別の室戸の漁船に乗り、数年後に船舶へと仕事を移した。猛勉強で機関士試験に合格し、大型船の機関長も務めた。ビキニはすっかり記憶から遠ざかっていた。

50歳を前に船を下り、室戸市の生コン会社で働いていた小笠原さんが、ビキニを思い出したのは80年代の半ば。ビキニ被曝の聞き取りを始めた「噂高橋生ゼミナール」の生徒4、5人が会社を訪れてからだった。

「そろいや、そんなこともあったなあと」

ビキニでの作業時、船員は付帯で取れたマグロと海

水で洗ったお米を食べていた。内部被曝はくもいといえる。しかし当時、船員たちの体は調べられなかった。船長や機関長が40、50代でがんになっていったと後で知った。

小笠原さんの体調に異常はなかった。ただ、何かの病気の引き金になるのではと不安も感じた。

「けど、もう今は気にせんようにしてます。聞き直りというか…」

小笠原さんは今、国を相手取った裁判の原告団に加わる。「あまり人前でしゃべるのは好きじゃない」と言いつつも、支援者らに求められればシンボウムなどで体験談を語る。

「私が語ることは、放射能が出るものをいつまでも扱いたったらいかなんか」ということ。あの日、大笠原洋にいた船員の記憶はずっしりと重い。(山田浩生)

追憶のマーシャル

ビキニ事件 70年

■ 3 ■

支援者の調査

今、聞かないといけけない

その口ぶりに、悲壮感がにじんできた。

「年末にあの人が亡くなつて、今年に入ってからもう2人がおらんって……」

安芸市川北乙の沼田郁夫さん(64)は、マーシャル諸島・ビキニ環礁の水爆実験で被災した室戸市の元船員への調査を続けている。これまで、約10人の元船員の話をも本人や遺族から聞いてきた。

本人から直接聞いたケースは半数ほど。元船員たちは高齢を迎え、生存者は年々減っている。当時一番若かった15歳の人でも80歳。この先の10年が大事な年です。今、聞かないといけな



2カ月に1度開く元船員らとの「お茶会」で話を聞く沼田郁夫さん(室戸市室戸岬町)

い
◇ ◇
中学教員だった沼田さん、慶多高校生ゼミナールの生がビキニ事件と向き合った。徒たちが、室戸で元船員に

聞き取り調査をしていると、980年代の後半だった。知り、地元の人がそういうことをやらんといかん」と刺激を受けた。
同じ思いを持った室戸の教員仲間3人と、元船員の調査を始めた。最初の教員は慶多ゼミに紹介してもらった。訪ねた先で他の船員を教えてもらい、またその先で別の船員を……調査対象は早づる式に広がっていった。この時はまだ、ビキニ事件から30年余り。元気な人が多く、現役で船に乗っている人もいた。
沼田さんたちは88年、約20人から聞き取った内容を冊子にまとめた。時を同じくして室戸に「船員の会」ができ、健康調査が行われた。だが、盛り上がりは長続きしなかった。沼田さんも90年に東洋町の中学校に異動し、調査活動は立ち消

えとなった。
時は流れ、2011年、「3・11」が起きる。東京電力福島第一原発事故が浜田さんの胸を突き刺した。「もしあの時、ちゃんと活動をしていたら、ビキニの問題をもっとアピールして世間の目を核問題に向けていたら、福島事故は起こっていなかったかもしれない」
沼田さんは一人、活動を再開した。ちょうど室戸市の中学校に戻っていた。かたがた健康調査を受けた元船員の追跡を始め、新たな証言を求めて歩いた。
「腰に隠されたものを表に出さないといけけない」19年に退職し、活動はさらに精力的に。教員O.B.と「ビキニ被災支援室戸の会」を結成し、元船員や遺族と交流を続ける。
「核問題は境界線をつくってしまおう」と沼田さんは課題を口にする。
ビキニ被ばくは「第五環礁丸事件」として、一隻の問題へと矮小化された。他の環礁でも水爆実験があったのに「ビキニ事件」と呼ぶのを反対する研究者もいる。
同じように、室戸でも特定の漁船だけを調べると他の船と境目ができ、被害が埋もれてしまうのではないかと。そう考えている。
マーシャル諸島の核実験は1954年以外にも、実に60回以上行われた。室戸の被災船は、またあるはず。もっともっと調べたい、浮かび上がらせたいといけけない。沼田さんが歴史を強めた。(仙田達也)

追憶のマーシャル

ビキニ事件70年

■ 4 ■

遺族の闘い

核問題 訴える使命

ビキニ事件は、この10年は法廷闘争の歩みと重なる。

訴訟への扉をこじ開け、敗れ、再び闘いへ。現在、国などを相手取った訴訟の原告団長を務める下本節子さん(73)＝高知市家ノ原＝は、「こげなつた父や仲間のため先頭に立つ」。

「国内閣府は、米艦に追いつた政府に責任を転嫁する。負けられん裁判です」

◆ ◆
きっかけは10年前、2014年9月だった。

政府は、米艦に追いつたマーシャル諸島・ビキニ環礁で

の本場実験の際、周辺にいる日本漁船の被曝状況を書いた文書を初めて開示した。厚生労働省が「ない」と言い続けたものだった。元船員の証言を裏付け

初めてのことだった。下本さんは遺族代表として原告団に加わった。父の大黒崎兵衛さんは、空母のマクログに乗り込んで被曝し、78歳でがんを患った。生前、ビキニのことを何も話さなかった。父の口を明かしたものは何だったのか。下本さんにとって裁判とは、田が隠した事実を明かす闘い。父の人生を知る際でもあった。

「この10年で、せめて多くの人を知った」「下本さんは、被曝を隠した父親が抱えていた不安や恐怖が今なら分かる気がする」



裁判の弁論を終え、支援者に報告する下本節子さん。多くの人の思いを背負って立つ(高知市丸ノ内2丁目の高知城ホール)

「国が資料を隠し続けた」といふ主張は認められなかった。原告団は投訴した。その一人、元船員の増本和典さん＝高知市＝は、がんと闘いながら控訴書に参画していた。ある時、下本さんに「ついでに、僕はあんなに辛い思いをした。でもま

増本さんの言葉がまぶさになった。「あんなに気持ち悪いなら、私もやらないといけない」。支援者たちも「原告らが被曝した事実が認められる」とした判決の一文で、かすかな希望を

(高知通信)

追憶のマーシャル

ビキニ事件 70年

■ 5 ■

元教師の信念 やらないと壁は崩れない

もながら漁師たちの興衰に気が付いた。西にこそができたり、声が出しづらくなったりしていた」

地元で高校教師となり、

1983年に生徒らと種多

といえ、ビキニ事件の埋もれた事実を浮かび上がらせたい。駐馬子産で見たのはこれだけなのか。その思いが原動力となった。

2014年、山下さんら

い。高校生たちが未来のために事実を知ろうとする力が大きかったのです」

「最初はものすごく怒りが強かった。何の罪もない若い人の人生を狂わして、放っているぞ。たけど、怒りだけでは40年も続かない。公文書が出た。こ

れで裁判ができると思っただけで、それまでに蓄積した全てをぶつけた。山下さんは、それまでに裁判の資料作成や船舶保険の申請、さらに学費会や資金集め、県外での講演……。奮闘した。日々々々だった。

「国や米国を相手にする一番難しい裁判。でも、やらないと壁は崩れない。信念はぶれなかった。機嫌に踏み切ったことで「原力者がぐーっと広がった」。元船員に遺族、専門家や科学者と支援の輪はみるみる大きくなった。

「エネルギを凝結する多々結成から40年余りが過ぎる。山下さんが走り続ける傍らには、休日をつぶして聞き取りに奔走した生徒や教員、おらかな性格で受け入れてくれた船員、捜査がいた。

「エネルギを凝結する多々結成から40年余りが過ぎる。山下さんが走り続ける傍らには、休日をつぶして聞き取りに奔走した生徒や教員、おらかな性格で受け入れてくれた船員、捜査がいた。

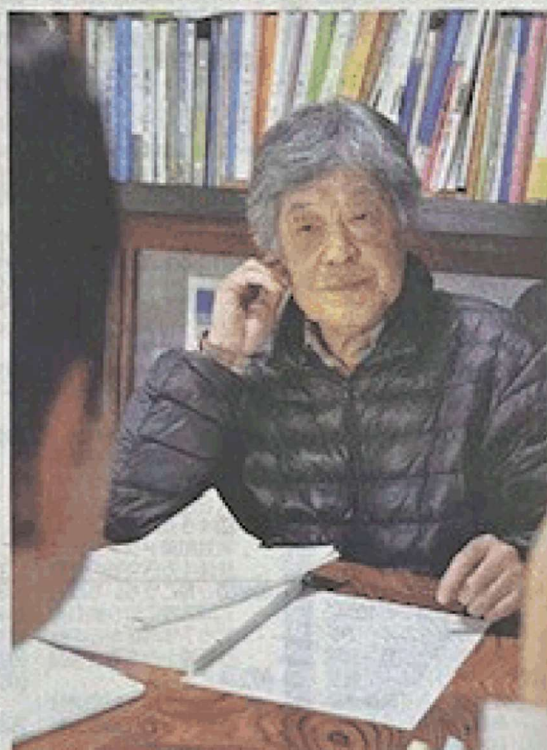
「エネルギを凝結する多々結成から40年余りが過ぎる。山下さんが走り続ける傍らには、休日をつぶして聞き取りに奔走した生徒や教員、おらかな性格で受け入れてくれた船員、捜査がいた。

宿毛市山奈町芳祭の元高校教師、山下正寿さん(79)。

約40年前、平和学園グループ「種多高校生ゼミナール」を率いて、ビキニ水場実験での本業漁船の被ばくに光を出した。

心血を注ぎ、活動をけん引した第一人者だ。

山下さんの原動力は、母の聲だ。駐馬子産での光景だ。母を半信半疑でいる人、田舎な漁師が年に一回、漁の合間にやってきた。ビキニ事件から、5年後、子ど



書齋を訪れる若者の話を、補綴員に手を当ててじっくりと聞く山下正寿さん(宿毛市山奈町芳祭)

「一方、殺人的スケジュール」がたり、数年前に彼が体を壊した。頸椎の痛みがひどく、眠れない夜もある。治療に通う日々、長距離移動も難しくなった。「体は持たなかったですけれど、受け継いでやってく

（山崎達也）
おわり